三河アララギ

平成二十四年

四　月　号

第五十九巻　第四号

ニューヨーク日記(66)

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

February 20, 2012 : Meet the breeds

Blue Shoe Diaries

犬猫イベントMeet the Breedsに行って来ちゃった！200種類以上のワンちゃんや猫ちゃんに会えるショー。本当に200匹以上いたよ！人間も大勢。。。ニューヨーカーはペット好きなのだ。ワンちゃん達は何かカメラ慣れしていてこんな感じに写真に応じていました。

I went to Meet the Breeds! Where you get to meet over 200 breeds of dogs and cats. They were all super cute! From the ginormous (is that a pony?) to the mini (is that smaller than a NY rat?!). And apparently, NYers love pets because it was a pretty big crowd. Funnily enough, the stars (dogs) seemed to have been used to the paparazzi so most of them were expertly posing. Like this chow chow here.

目次

第五十九巻第四号（通巻七〇〇号）

表紙　シモクレン
ニューヨーク日記（66）　今泉　由利（1）
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」　Blue Shoe（2）
歌集「一本の木」　杉浦　弘（5）
小さな涙　岡本八千代（6）
雛の顔　伊藤八重子（7）
杏か　弓谷　久子（8）
バースデー　内藤　志げ（9）
熱燗　安藤　和代（10）
如月の雪　林　伊佐子（11）
蕗の薹　胃甲　節子（12）
春の冬　伊藤　忠男（13）
柊　金津　文枝（14）
やさしき友　半田うめ子（15）
「大和三山」　佐藤　喜仙（16）
雨水　清澤　範子（17）
玄米を　伊与田広子（18）
握手　近藤　映子（19）
母の本棚　北川　宏廸（20）
オーロラ　杉浦恵美子（21）
山茱萸　堀川　勝子（22）
茶畑　平松　裕子（23）
子象のマーラ　小野可南子（24）
マグカップ　山口千恵子（25）
何故　夏目　勝弘（26）
黒き猫　秋山　逸穂（27）
御津浜　白井　信昭（27）
色と香と　富岡　和子（27）
年賀状　阿部　淑子（28）
今日も楽しく　稲石　せき（28）
『ことよせ』　いーはとぶ（29）
湯たんぽ　今泉　由利（30）
贈呈誌　二月号　（31）
『俳句』　植村　公女（32）
一石（32）
佐藤　喜仙（33）
晧一（33）
『私の一首』　近藤　映子（34）
清澤　範子（34）
杉浦恵美子（35）
内藤　志げ（35）
絹の話（17）　今泉　雅勝（36）
物理学者と詩歌の世界（27）　一石（38）
短歌に詠まれた茂吉　鮫島　満（40）
和歌から派生した季語の本意（その二十一）　佐藤　喜仙（42）
山の辺の道への思い（人麻呂塚）　夏目　勝弘（43）
「歴代天皇御製歌」（三）　貫名海屋資料館（44）
「氷魚」のことから（135）　岡本八千代（45）
ことのはスケッチ（400）　今泉　由利（46）
和菓子街道（66）　平松　温子（47）
お知らせ・編集後記・三河アララギ規定（48）

感　銘　歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

若萌えの木下苔をのぼりゆく聖のみ墓ひとつ白きに

P 194

常臥しの聖の九年思ふにも泉に鯉を飼はぬすがしさ

P 195

歌集「一本の木」

杉浦　弘

涙にて乾飯（かれいひ）ほとびし昔よりことば生きて来ぬ椎葉の村に

焼畑ノ大豆ノホウガウマカトデス椎葉の媼ためらはず言ふ

橋の上に車に轢かれ螢あり呼吸（いき）せぬ光放ちたるまま

小さな涙

蒲郡　岡本八千代

曾孫の顔に残れる一粒の小さな小さな涙のひかり
曾孫の頬の涙の一つぶにおのづとわれも泣けてくるのよ
二階より赤児の泣き声また聞こゆ明日は東京へ帰るその声
授かりし小さき者への愛しさよ曾祖父曾祖母にいつまでかつづく
くれなゐのつらつら椿の花花に粉雪舞ひまふ止みつつ舞ひまふ
たまたまに寒のうす日の淡ひかりあはれ粉雪いづこへか舞ふ
雪舞へば傘さして行く友の家へ知らさずにゆくこころ楽しも
常のわれの湯呑にそそぐ熱々の白湯よりのぼるしろじろの湯気
両手にて包みもちたるわが湯呑の白湯のぬくぬく人偲ばるる
カフカの本「人生論」におもふかなわがネガティブの心も良しと

雛の顔

豊川　伊藤八重子

時かけて子の炊きくれし白粥にあしらはれいる芹の青さよ
気晴しのショッピングに行く街道の桜並木は未だ芽吹かず
はん天着て毛布にくるまり坐り居り早朝覚めし老身かなし
大根のスライスおろし頼まれて生きてゐることの実感が湧く
留守番のわれの炬燵のスイッチを子は確めて出でてゆきたり
まっ白し朝の障子に照らされつ頬たたきつつ今日の始まる
擂鉢にとろろ汁摺るを手伝ひつ巧みに摺りし八重作祖父(ぢい)さん
庭よりの三ッ葉の新芽かほりつつ吸物椀つつむ夕餉の卓に
膝の上に洗濯物を畳みをり明日は帰らん夫の待つ家
ねんねこに孫を背負ひて選びし日よ雛(ひひな)のお顔しみじみと観る

杳か

豊川　弓谷　久子

家毎に豆をまく声子等の声杳かとなりたる節分憶ふ
恵方とも言はず太き海苔巻きを子と頬張りぬ今宵節分
初午と赤飯届くしきたりを守る嫗の炊きし赤飯
今年こそと勢いて来る奥山に梅の蕾は小さく固し
去年の今日この梅林に散り果てし花を惜しみて佇ちたるものを
差し上げし手編みの帽子かむりをり棺の中に眠りゐる如く
お気に入りの帽子なりきと聞かさるるこれもえにしと手を合せたり
戦闘機に乗りゐし昔を語られし弾みし声の耳に残りぬ
遠目にも仄かに白し奥山に遅れ遅れて咲き初む梅か
喜寿の宴済まして直ぐに病みつきし父五十回忌二月の尽

バースデー

豊川　内藤　志げ

漬物に冷へし手洗ふもそこそこに炬燵の部屋に入りてしまふ
炬燵にて暖(ぬ)くもる手より漬物の柑子の香り匂ひ立ちくる
六つ割りか四つに割るかまず半分菜切り庖丁に白菜を裂く
桶よりも高く漬けたりし白菜は一夜の内に桶に収まる
ねず色の雲は南に層をなす雨の一日のカーテンを閉ず
ホカロンを足に四枚背に二枚河津の桜は開きいるかや
夕食に御津よりの海苔掌にパリパリと巻くわがバースデー
朝の窓雪積りたる本宮の峰筋際立ち雄々しき姿
カーテンを細めに開けて覗きたり予報通りの雨の降り始む
五年を管の食事の義姉(あね)様に椀に大盛り箸立てまいらす

熱燗

豊川　安藤和代

「またあした」幼が二人公園で約束指切り夕陽が淡い
鵯の落してゆきし種なるや庭に一本の万両育つ
息白く坂道行けば財賀寺の仁王門にぞ身のひきしまる
合格祈願絵馬にやさしく初春の陽はふり注ぐ財賀寺の庭
センター試験ひと日を案じそわそわと孫のふとんを冬の陽に干す
孫には孫の言い分あるを思ひつつまあるく丸くリンゴの皮むく
亡き母の裁縫箱の旧姓の薄れいし文字をそっとふれみる
レジに列ぶ人も今宵は鍋物か葱白菜がカゴから見ゆる
「ごめんなさい」夫に素直に言えなくて晩酌熱燗一本増やす
夕づけば温室に明り灯り初め電照菊を眠らさずをり

如月の雪

岡崎　林伊佐子

如月の雪降る庭の沈丁花はな芽ふくれて香のたちたり

如月の雪は自在に風に舞ひ杉の木の間をすでにさまよふ

夫のまく餌に寄りくる寒雀警戒もなく軒に集まる

餌たりて物干竿に体寄せ雀は静かに日向ぼこする

藁囲ひしながら冬を越えて行く牡丹に小さき蕾みつけり

野牡丹の花咲き終れば玄関に福寿草の花点すごと咲く

身にしみる寒気に育つ根菜類の冬耕終へて農具洗ひぬ

わが畑に朝日の差せば霜解けにぬれて光れる蔬菜の青さ

わが友が財を守りて独り棲む老いの余生のふる里おもふ

をさな名に呼び合ひ野菜を分ちあふ共に老いたる古里の友

蕗の薹

豊橋　胃甲節子

暖かくなれば神田川の堤へゆき芽生へ初む蕗の薹を捜さむ
陽の光暖かく見ゆその光温度は五度と思へない色
弱気にはなるまい優しく暖かき愛深き人等に生かされて来ぬ
久し振りの優しき雨に潤ひを得て田も畑も黒み増しゆく
しっとりと雨を含める畑土を愛しみをらむ農家の人等
吾が為にわざわざ庭の花を撮り送り下さる人の優しさ
鈴成りのピラカンサの実も漸く野鳥の餌となり撓ひし
菜園に咲く豌豆の白き花御近所の奥様の丹精のもの
低温期に入る予報に髪洗ふ吾に取りては嬉しきシャンプー
音も無く優しき雨よ午後の雨送られし最後の蜜柑食べたり

春の冬

大阪　伊藤忠男

ウイルスの変わり身速さ生きるため人との戦さ避けられぬとて
駅毎に冷気吹き込むドアのそば立つ位置中にとればと悔やむ
節分も記録ずくめの低温に豆投げ叫びつい寒さ外
食すれば幸せ招く恵方巻き豆に変わりて胃袋充たす
幸せの北北西に何あらん根雪舞う雪雪重ね雪
凍てつきた根雪も溶かさむ友と友熱き話題に春訪れる
雨粒に雪が混じりて通勤の車で混みあう駅前の朝
寒さあり荒れた日もある如月の試練に耐えてこそ春きたる
冴え返る朝とは言えど厳しすぎ弥生近しと誰思わざり
ピンポンの球打つ速さ耳澄ますピンポンの音今もピンポン

柊

島根　金津文枝

内湯から硝子戸越しに見ゆる雪温泉ゆつくり体を沈む

温泉で昔懐かし友に会い驚きと健康を語る主婦達

柊の赤実ぎつしり雪積る枝見ゆる節分のわが庭

一人住む節分の豆九十一粒福は内鬼は外と雪上に

小詩鬼山房と夫名付け毎月歌俳句福祉学生六名茶話会に集る

夫の集めし鬼の面三十一箇出雲大社で求めし赤鬼青鬼は私が

外の方が暖かなれば若き母は幼なを抱き日向ぼつこの姿見受けし

色紙に貼る男雛女雛サワヤカサロン六時間の集いに

午前六時明星ひとつきらきら光るに雪はちらりちらり

京の旅に竹林二千本の美しさ夫との思出八幡宮男坂女坂タクシーで

やさしき友

新城　半田うめ子

くるしみきいじめにあひて救ひの神やさしき友の亡くなりし報
運動にすぐれてゐたりきひふみ様何故亡くなりしか悲しかりけり
天国へ行きし友を思ふ働くを楽しみたりきやさしかりけり
雨の降りて西川の流れ早くして数羽の小鳥の舞ひてゐるなり
又今日もにぎやかなりぬ東の杉林の中からすのさわぐ
吾が母の塩瀬なりしの手作りのお茶を貰ひぬ味のよくして
わが町の卯月なりし食品の楽しみて食む孫の支払ひなりぬ
道の辺に咲きてゐるなり美しくわびすけの花楽しみ眺む

「大和三山」

東京　佐藤喜仙

外苑の雪の中より飯桐の赤き実拾ひ机上に飾る
都心地にひろごる苑の古き池薄氷はりて光り輝く
昨夜降りし雪の嵩ある広場には子供遊びし雪ダルマをり
うれしさに雪原に足踏みこめば心映せる靴あとのこる
玉川の上水の辺の緑道に光譲らぬ水仙の群
堤より桜紅葉の水に落ち清流を染め彩の流るる
萌へ出づるはこべらの野に我が心あづけてをれば犬尿すなり
木洩れ日のベンチにかけて鶯を聞き一人静かに本読みにけり
禅寺の褪する作務衣が落葉掃く朝餉を告ぐる魚鼓を聞くまで
春浅き大和三山見渡せばひときは光る畝傍山はも

雨水

春日井　清　澤　範　子

町内の会計役員務めゐて夫と読み合せつつ出納簿を書く

庭師を頼み思ひっきり剪定した椿縮れた枝に若芽出で来ぬ

吾の持病また一つ増ゑ喘息に悩まされつつ点滴に通ふ

中庭の椿の若芽に目をこらす三ツ四ツの春待つ蕾

カレンダーに病院の予約日書き込みて家事の事柄を書き加ふなり

結婚の祝に戴きし振子時計チクタク軽やかに時を刻めり

雨水の日かすかに光るこもれびに春の温もり感じてゐたり

月曜の診察室は混み合ひて目を閉じながら呼ばるるを待つ

二月二十六日吾七十四歳の誕生日娘はケーキを買ひてくれたり

吾が部屋に徳川家康の養生訓書かれし屏風ときどき読みぬ

玄米を

豊橋　伊与田広子

知らぬ間に年取り居たりセールスマンは子や孫の年齢の人ばかり
わが家（いえ）を訪れたるセールスマンガレージにマンションを建てよと云ふ
資金なくマンション建つるは断はりぬ母借家を建てしに苦労せし
資産税高く収入少きも終の住処にしたきわが生涯
玄米を電子レンジにて芽出しにし圧力釜に入れ飯を炊く
鮭イクラ買ひたしと思ひつつ帰るなり歌会の帰り重き手荷物
歌稿書き出して終へば又行かむよく見定むれば欲しきものあらむ
われ行きし北海道展にぎやかに他の階閑散としてをりぬ
友人の快気祝のコーヒーを飲みつつ歌稿考ふ夜も更けて
北朝鮮ニューヨークフィル招きしは平和を願ふメッセージならむ

握　手

名古屋　近藤映子

物言わねど夫との握手吾の手をじんわり握る力あり
大寒の小雨しょぼ降る冷たき日風邪引く吾は夫を見舞えず
突然に両耳鳴りの強まりて耳鼻科通ひの始まりぬ
名古屋にも十五糎の積雪に娘は車をあきらめ出勤す
喉痛む風邪は何ぜか長引きて薬は腹具合をそこね
物言えぬ夫に声掛け握手せば吾見る夫の大きな目
如月の凍て付く道の夕暮れに夫を見舞ひて帰る淋しさ
吾も又内科耳鼻科整形と通ふその時々に夫の顔浮ぶ
如月の少し夜明けの早まれどまだ〳〵冷たく凍る朝
一枝のペットボトルのダチュラの木白い根長く伸し蕾も

母の本棚

東京　北川宏廸

顔身体どっかりとして笑顔なる父おはします仏壇の部屋
ぽつりんと一人テレビを見入る父そこだけは古き写真に見えず
目を開けてひと言も母は喋らないインフルエンザの布団の奥で
うたた寝の母に毛布を掛けてやる母の模様の母の毛布を
読まずとも子の名前載る論文や書籍が並ぶ母の本棚
本五冊一方の手に栗金団（くりきんとん）本屋帰りの至福のひととき
月虹（げっこう）が石垣島に出たといふビクトリア瀑布のそれよりも濃く
人ひとり歩き行くなり白壁は夕陽の当たるときが淋しい
孫娘の四人が並ぶ横一列互ひに保つ美しき距離
もの忘れと政治経済ぼやきつつ小学校のクラス会果つ

オーロラ

蒲郡　杉浦恵美子

弟のために朝食用意せむそうだ彼には里芋味噌汁
弟とふたり朝餉に向へども家族の歴史は甦らない
節分は亡き人還る日と伝ふされども夜の闇は無機質
オーロラを見に行かむとぞ思ひ立つ服喪を過ぎて踏み出すために
北極圏トロムソ空港迎へ来ず雪また雪の彼方蕭蕭（しょうしょう）
小一時間もあれば一巡トロムソは雪の坂道何もない街
降りしきる雪の港に佇みて沿岸急行船入港を待つ
あっあれは雲かいやいやオーロラだ覚束ないほど幽けき光
スボルバーの小さな港の北の空一面幽けきオーロラ揺るる
ああ我はこれ見むがため遥々と北極圏の島に来たれり

山茱萸

豊川　堀川　勝子

山茱萸を共に愛でたき友有りき冬芽健気にみな空を向く

山茱萸の花咲く頃に今年こそ今年こそとて会ひたきひとり

山茱萸を陽にちかぢかと移せども春近き風まだまだ寒し

癒ゆるなき腎を病みゐる弟の減塩食パン今朝また焼きぬ

頑なに我(が)を張り通す弟よすみれは低く根を張りて咲く

健康管理強ひゐる吾に弟は体重測定がんこに拒む

霜枯れの草をおしのけ萌え出でて葉柄ちぢるる蕗の薹見ゆ

冬枯れの庭に兆せし山茱萸の小さき冬芽はみな空に向き

過去のこと話して思ひ出あたためる従姉妹の「スノさん」今朝亡くなりぬ

亡きいとこの声聞こえくる様な夜来の雨と窓を打つ風

茶畑

豊川　平松裕子

蝋梅の花咲く家々を過ぎて来て村は果てたりこれより国坂

この家の庭に御衣香の桜咲くを我は知りをり春の待たるる

我が店の静もる中に秒刻む動かぬはずの古き時計の

家計費と我が店の売上げは明確に分けて記さむと思ひつつ眠る

曹操と劉備玄徳の例を出し人の思ひに報ひよと説く君

春近き雨降る中に裏庭の榾木に一つ椎茸の見ゆ

昨日より今日は大きくなりてをり出窓より見ゆる小さき椎茸

ダージリンは霧深き町とふを思ひ出す掛川の霧の中をゆくとき

頂きまで茶畑見ゆる川根過ぐ茶の都市ダージリンも高地とぞ聞く

配管に異常起りしか電球を伝ひて落つる水を手に受く

子象のマーラ

豊川　小野可南子

½成人式なる千尋への手紙としたり背に負ひし日を
少しばかり冷たきものも落ちる朝子象のマーラに逢ひに来ました
幼気（いたいけ）な子象のマーラのその姿見たしと杖をつきつつ来たり
飼育員に鼻をからめて甘ゆるマーラその鼻息は私に届く
霜とけてやはくなりたる庭土をおこして二人は泥んこあそび
一皿のピザと覚しき造形を残してありぬこの陽だまりに
スプリング〝春だバネだ泉だ〟と今朝のコラムのリズムはうれし
吹く風に真向ひてゆく今日の日よ背をまっすぐ伸ばして歩く
あたたかき雨は止みたり明日には開かむ紅梅（うめ）のふくらみ一つ
春の色と見なして望む太平洋久にひさにぞ水平線を

マグカップ

豊川　山口千恵子

天空の茜に染まる飛行雲刷毛目のごとくぼやけてゆけり
ヨーグルト盛り分くるには丁度よし白きマグカップ二つ選びぬ
寒の陽に刻みし大根拡げゆく淡きみどりも混りて瑞みず
絶え間なく空より舞ひくるぼたん雪落ちたる地にはとどまることなし
春になる雨の静かに降り続き田土黒ぐろ小麦青あを
枯れ草も田土も濡らし音もなく春に近づく雨降り続く
飾りたる雛人形の前に置く花一輪の紅梅の花
手描なる模様に微妙なる相違あり夫と区別するコーヒーカップ
蛇口より迸り光る寒の水しばし待ちゐる湯に変はるまで
一花（はな）づつためらふごとく咲き出づる枝にぽつぽつ山茱萸の黄

何故

豊川　夏目勝弘

なんとなく物足りなさを感じゐしジョウビタキ今年は我が庭にこず
部屋に居る日日多き今年デデポポと恋呼ぶキジバト鳴く声聞かず
水の辺に必ず尾をふり忙しげなセキレイさへも何故こない
我が庭の梅は未だ蕾のまま今朝は下見か一羽のメジロ
夕暮の電線に騒ぐムクドリの今日は数羽の群れのままなり
双眼鏡胸にさげしがテレビにて夏に害虫多きを言ひぬ
運動と巡る田畑に家家に鵜漁る姿見るなし
南なす庭の冬木の枝枝にふくら雀を見しは昨年なり
凍て雀みることもなく早ばやとニゲル二月のゆかむとすらし
鳥達を見ぬ日つづくも我がたづきに障りなけれど淋しさのあり

黒き猫

「招待」　秋山逸穂

黒き猫尾をたてふるわせ歩みよるこれは私の夕餉のおかず
肉饅頭縁台に坐りほおばれば湯気はたちまち眼鏡曇らす
南より夜風吹き抜く停止場の明りがひとつ遠くに見ゆる
寒風の吹き抜く枯れ野のさくらの木朝陽を背負い細枝ふるわす
ぬかるみに足跡残し歩み来し枯れ葦原に初雪が舞う

御津浜

豊川　白井信昭

御津浜のはるか沖合赤白の斑の煙突浮き立ちて見ゆ
山頂の三角点を目指しゆく落ち葉踏みゆく木木くぐりぬけ

色と香と

東京　富岡和子

名残花ちいさき束にあわせみて色香とどけむ友と再会

年賀状

横浜　阿部淑子

書き進む一枚ごとの年賀状面影浮かべ幸をぞ祈る
豪雪に百余の車の立ち往生如何に積るや自然の試練
体操に脚腰鍛えバスに乗る席をゆずりて心若やぐ
大学の合格叶えしいとし孫湯島天神参る老夫婦
高血圧を押して参加の新年会帰りし夫の血圧下がる

今日も楽しく

豊川　稲石せき

能もなく財もなけれどはらからに助けられつつ苦しまざりき
歩み来し九十四年の思ひ出を胸にたたみて今日も楽しく
わが一世貧乏ぐらしになれきってけんかも知らず楽しかりけり
卒業式はみんな成績優等賞わが家のごほうびはお汁粉なりき

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

日本の花のごとくと名付けられしこのグァム島の「南国桜」は　鈴木美耶子

蹲の傍らの臘梅咲き初めぬ面影は浮かぶ亡きおとうとの　吉見幸子

新聞の大き包みをかかへゆく翁はホームに百合の香残し　牧原正枝

友の畑一面に蒼の福寿草開花をば待つ君も私も　岩瀬信子

ハナカヘデの裸木つづく並木の空触れば毀るるやうな昼の月　石田文子

舞台に立つ白きドレスのわが幼な少しほほゑみてバイオリン弾きだす　山﨑俊子

住む人の絶えて久しきここの庭今年も白梅の花の芳し　三田美奈子

玄関にフローラル・ブーケの香を立て花の香の中友を待ちをり　稲吉友江

湯たんぽ

東京　今泉由利

水の輪の広ごりゆけり多摩湖面カイツブリは潜りてをりぬ
ユーラシアの大陸よりか飛びきたり金黒羽白と日だまりにゐる
柳瀬川空堀川と合ひ会ふところ河原の石にしばらく坐る
冬に来し冬明けぬまに行かむとす鳥達群るる空堀川を
沸点になりたる水を注ぎ入れわたしの夜の湯たんぽづくり
をさな日の思ひのなかに眠りゆく温温温し湯たんぽ温し
偏旁脚（へんつくりあし）にも月の組み込まれ月もつ我身に今日の月かげ
カーニバルの夏の光の中にありき豹の仮面の今日の冬の日
朝の日は一直線に差しきたり一番奥の仮面が光る
目も足も自らのもの自の考えいだすことを信じる

贈呈誌　二月号

「秋楡」　西尾清子

甘酒の喉にしみ入る初詣去年の願いは今年に続く

不破明子

暖かき日ざしさしこむ冬至釜たぎりたる湯の音の絶えざり

「愛媛アララギ」　濱田正敏

さっさうと去りゆく娘を玄関より腰屈めつつ我は見送る

大石ひさえ

この冬の根雪とならむ頂の雪に紛れつつ凧ひとつ舞ふ

「鹿児島アララギ」　吉田ヤス子

下りゆく山路に沢の雪消水次第に音のひびき高まる

山本和男

雨やめば又戻りくる寒さとも今日の終りに火山灰を掃き寄す

「高知アララギ」　濱田静子

青蛙冬眠するを忘れたか蜜柑山にて夕日浴びおり

竹村稔美

ベランダの灰に足跡残したり噴煙やまず桜島の宿

「滋賀アララギ」　津島佐和

白山を遠くに望みて登りゆく曲がりてくだりてここよりは美濃

「冬雷」　立谷正男

息しろくなりたる朝の道のべに母子草ひとつ色褪せず咲く

大塚亮子

玉眼をカッと開きて八百年何に怒るや風神雷神

「柊」　内上照子

うづたかく積みたる薪の行儀よく小屋のかたへに冬を待ちゐる

藤記光子

足羽川の浅瀬に群れいる白鷺の歩む水面に朝光まぶし

「桎の木」　山本百合子

かぎ針をそれぞれ持ち来て湯の宿に休む間惜しみ編物をする

田中つね

黒き実を数多零せるおしろい花小さき終りの花も萎えたり

「群山」　斎藤トシ子

味噌を搗く大豆乏しくこの冬の仕事の予定一つ消したり

寒河江巌

ひととせの青刈り稲のサイレージ山積みされぬわが牛舎前

「第六回清水比庵大賞」　黒田誠二

峡の田を継ぎ夜神楽の笛を継ぎつまりは父の一世継ぐ吾

「穂の原」　鈴木せつ

正月は孫曾孫の集まり多し帰りし後に淋しさもあり

「俳句」

地の底の動く気配や今朝の春　植村公女

立春や王子稲荷の火伏せ凧

友の死を友に伝ふる余寒かな

浅き春我が名付けしの猫電車　一石

意味のある偶然をかし早や弥生

夜の庭宇宙の脈動春近し

雨後の道貼りつく落葉手の形

煮凝やとろりと浸むる吟醸酒

時雨るるや飛沫烟れる多宝塔

佐藤喜仙

碁石打つ音の響けり冬うらら

物忘れ思ひ出せぬ日向ぼこ

雪しきりモノトーンの寂しけり

皓一

私の一首

師走入り夫を訪ねどわが夫はリハビリ後の疲れいねむり

近藤　映子

夫が出先にて倒れ救急入院、「左脳出血右マヒ」、九死に一生を得て以来、今の医療制度とかで、八回の転院を経て満七年になる。娘と共に殆ど今も、毎日又は、交代で見舞通いを続けて居る。今年も早や十二月と思いつつ夫を見舞うと、何時もは目をパッチリ見開いて私を見る。私は手を洗い左手握手し、テレビを付ける。しかしその日は、ボンヤリ目をしているので、気になり担当の看護師さんに訪ねると「リハビリ時間が遅れて疲れてるかも」と。私はそうかと思う他無し。

小さき丘崩され一面ひろびろと細長き窓の家建ち並ぶ

清澤　範子

わが家が現在住んでいる愛知県共給公社分譲住宅に入居しましたのが、昭和三十五年、十年一昔と言いますが、その頃は、当時周囲に何もなく、建築物も小さな店が二、三軒あるのみでした。現在では住宅ブームで、どんどん丘が崩され、どの家も細長き窓のつく家々で、屋根は三角、建築様式も、鉄筋コンクリートと強化され、中央線の眺めも変りました。

遥か彼方名古屋ビル群シルエットその向ふにも夫は居ぬのだ

杉浦恵美子

師走中旬に、まだ間に合うかもと紅葉の名所犬山寂光院に行きました。他に寄り道していたので到着したのは日没少し前でした。石段を上り、珍しい二人乗りのリフトに乗って本堂にたどり着くと南に向って尾張平野の眺望が素晴しく、目を凝らすと名古屋駅のタワービルが望めました。時雨上がりの夕日と共に物の哀れ窮まるシーンでした。ビル群から類推される人の営為のどこにも夫は居ないのだということも強く意識された瞬間でした。

大根の葉に積りたる雪の嵩言ひ合ひながら葱を束ぬる

内藤志げ

朝から雪の舞ふ日皆さん雪を詠まれるだろうな、昨日採り入れた葱が有り作業場に、さんさんと降る、道の向うの大根の畑葉がまだ青々と、雪が次第に積って行くきれいな雪景色、何糎くらい積っただろうか、夫・嫁・私それぞれ、それぞれ違い面白い。

雪のおかげで一首となりました。

絹の話 (17)

「アトリエトレビ」今　泉　雅　勝

絹と切り傷

今から24年前の8月長野の穂高町で世界の絹学者が集まる国際野蚕学会が開かれていました。私は内外企業、個人の開発したシルク製品の展示委員長として前々日から町の大きな体育館いっぱいに展示ブースの立ち上げ、参加国の国旗等の装飾に追われていました。ちょっとした事で指に切り傷をしてしまいましたが医者に行くほどでもなく、さりとてドタバタしている雑菌だらけの中、夏期と云うこともあって、口で血を吸ってバンドエイドを貼るだけはいささか心配でした。

翌日本番、開会式終了後、インドからの絹博士2名のお世話係も引き受ける事になりました。リゾート地なので沢山ある民宿の中ら敬虔なるベジタリアンに対応してくれる所を探して、朝晩送迎する事にもなりました。当然指の傷もすぐに見つかり、どうしたと聞かれ、是是然々と云うと、ベジタリアン博士はバンドエイドをはがし持ち合わせていたインドのタール蚕のちょっとうすぎたない紐を切って指に巻いて、「もうこれで大丈夫だ！」と云うのです。絹、特にヤママユが科の絹は抗菌性（静菌性）に優れている事は学会では耳にタコが当たるほど聞いていましたが、我が身で実験する事は初めてでした。これは良い機会に恵まれたと思いましたが、いつ洗濯したか判らないよれた紐に一抹の不安を感じていました。ところが翌朝になると傷口は乾いた様になり、しぼんだ感じになりました。薬を塗らなくとも、腫れる事も膿む事も無く、子供の頃から経験して来た切り傷手当とは様子が明らかに違います。治癒するスピードが驚く程早いのです。1週間もしないうちに完治したことはいうまでもありません。

以来切り傷は勿論、吹き出物などにはいつも絹の端切れを貼ってからバンドエイドや包帯をする事にしています。重傷の時は寝る時、絹（くず繭）の軍手のような手袋をします。少しく効果が促進される様に思われます。

手の荒れ性の人は寝る時、くず繭の手袋をすると良いと思ます。勿論おしゃれの時はツルツルのきれいな物が良いでしょう。お米でいえば玄米と白米の違いの様なものでしょうか。

なぜヤママユが科の絹（野蚕絹）がより効果が有るのか確たる研究は有りません。あくまで私の推測ですが、ヤママユがの一本の絹糸（人間の頭髪の1/10～1/20の太さ）の中にナノ構造の２００前後の孔（ナノチュウブ）が有り、孔の中には繊毛が片側に密集していて、家蚕絹（一般の白い繭）とアミノ酸18種類の構成比率の違いや家蚕絹には無い野蚕絹のそれぞれが持つ特有な色素（タンニン、フラボノイド等）が相乗して他に例を見ない様な機能性（抗菌性）を発揮していると思われます。しかし家蚕絹も野蚕絹も程度の差はあれ、各種の菌を増殖させないだけで殺菌はしないのに傷の治癒に素晴らしい効果を発揮するのはどうしてでしょう？

家の軒に作られる蜂の巣も絹と云われます。其の巣で薄いふわふわの白い蜂の子は雑菌からも紫外線からも守られ、日照りの時も乾きもせず安全に成虫になる迄育つゆりかごです。それは繭が蛹を守る機能性と類似しています。

なぜ巣の本体が茶褐色なのに一つ一つの蓋だけ白いのか判りません、それぞれ機能性的役割が有る筈です。

蜂の巣を手に入れ次回傷をした時、蜂の巣を使った実験をしてみたく思います。

５年前の夏、家でコップを落とし破損したコップを踏んで足のフクラハギにガラスの大きな破片が刺さり、それを抜くと大量出血でいささか困惑しました。出かける時間が迫っていましたので、野蚕絹で巻いてスニーカーを履いて車を運転して軽井沢の1週間ショップを立ち上げ、なにも薬をつけること無く、そのまま1週間が過ぎました。足の裏は蒸れて雑菌も多いので、膿んだりしなければと思っていましたが、やはり3日目には傷口が乾いて来て普通に仕事が出来ました。

日本の多くの家庭には何兆円もの絹製品が眠っています、今日下取りに出しても二束三文です。捨ててはもったいないので、不要な絹地は小さく切って、バンドエイドや包帯と一緒に置いて上記の様な時役立てて下さい。絹は古くなっても機能性は衰えません。真綿など有ったら同じ様に使う事もよいでしょう。絹は美しく着る事ばかりでは有りません。

物理学者と詩歌の世界（27）

一　石

ルイ・ド・ブロイ

今回はフランスの物理学者で物質波（ド・ブロイ波）の提唱者ルイ・ド・ブロイ（Louis de Broglie、1892－1987）を取り上げる。ルイ・ド・ブロイは名門貴族ブロイ家の一族として、フランスのディエップに生まれた。ソルボンヌ大学で物理学を修め、1924年に博士号を取得。1926年から母校で教え、1928年にアンリ・ポアンカレ研究所の理論物理学の教授となった。1929年には「物質波の提唱」によってノーベル物理学賞を受賞（参考資料1）。

20世紀の初頭、物理学会は光の本性をめぐって混沌としていた。それまで光は波であり、波に特有の回折や干渉を示すことは「物理の常識」であった（注1）。ところがアインシュタインは1905年に光電効果といわれるミクロの世界の現象では、それまで波として扱われてきた光が（波動性とは対極にある）粒子として振舞うことに気がついた（参考資料2）。1923年にはコンプトンが行なった電子によるエックス線の散乱の実験においても光は粒子として振舞うことが示され、光の粒子説は正しいものと認知されるようになった。波動粒子、なんという矛盾であろうか。結局、光は波としてだけでなく粒子としても振舞うという「二重性」をもつことが結論づけられた（注2）。ド・ブロイは、そうであれば逆に電子などの物質粒子もまた波動のように振舞うのではないかという大胆な「物質波」の考えを提唱した（博士論文、1924）。当初それはあまりにも常識はずれの説として顧みられなかったが、アインシュタインがその重要性にいち早く気づき学界に広めた。その後、物質波の概念はシュレーディンガーが波動力学を定式化するのに使われ量子力学における基礎概念となって定着する（参考資料3）。実際、ニッケルの単結晶を用いたデヴィソンらの実験（1927）、また雲母の薄膜を用いた電子線の干渉現象を観察した菊池正士の実験（1928）によっても確証されることになった（注3）。

以下ド・ブロイの評伝（参考資料4）に基づき紹介する。

ブロイ家のプリンスは14歳のとき、リセ・ジャンソン＝ド・サーイに入学し、はじめて銀行家や実業家の子供たちと知り合いになった。物理と文学が得意で、数学と化学は普通であったが、読書はとくに歴史関係を好んだ。17歳になって希望通りソルボンヌの歴史学科中世史専攻に入学。しかし、ルイより17歳年長のすでに著名な実験物理学者であった兄のモーリスの影響もあり二年次に理科に移籍。1914年に第一次大戦が勃発し、彼も工兵として出征。科学の知識をかわれ、無線連絡の中枢を担うエッフェル塔の電信係に配属された。このときの経験から物理学に興味を抱くようになる。

戦争が終わると、6年間のブランクを取り戻すべく、ド・ブロイは研究に埋没。彼の狙いはプランクの法則とアインシュタインの法則を関連づけることで、その思索の過程で、「光が粒子であるとともに波動でもあるように、物質もまた粒子であるとともに波動でもある」という有名な「ド・ブロイの仮設」が生まれたのである。1929年度のノーベル物理学賞は、プランク、アインシュタイン、ボーアという偉大な先達に続き、ド・ブロイに与えられた。しかし、この頃から、彼は長い沈滞の時期に入る。

1960年、兄モーリスが85歳で亡くなり、ルイは公爵の称号を引き継いだ。70歳のとき、科学アカデミーにゼミナールを開講。ゼミナールで指導しながら、波動力学に関する30編を越える学術論文を書き上げた。13年間それを続けたが、ある日アカデミーの中庭で転び、しばらく起き上がれなかった。彼はそのことを恥じ、その日からアカデミーの終身書記を含む一切の公職から離れ、自宅に隠棲。その後はもっぱら自宅で物理学の研究に打ち込んだ。しかし、ついに計算力が衰え、昨日のことよりも遠い昔のことが鮮明に思い出されるようになって彼は人生の幕を閉じる覚悟をした。

エピソードをいくつか。

1）物理学者エーレンフェストはアインシュタインに「もし、

ド・ブロイの言っていることが本当なら、私は物理学を何も理解していないわけだ」と打ち明けたとき、アインシュタインは「とんでもない、あなたは物理学をよく理解しているよ。理解すべきなのは天才のことなのだ」と答えた。

2）ルイは、エッフェル塔の持ち場でさまざまな人間に出会い、社会的視野を広げ、軍隊の醜い部分も経験し、はじめて「人生」を知ることになる。彼はこのときの同僚と生涯にわたる友情を培った。1929年末にその1人からきた便りを彼は生涯たいせつに持っていた。

親愛なるルイ

きみはきっと相変わらずいたずら好きなんだろうね。

でも、今度のいたずらは最高だ、ノーベル賞だなんて…

3）日常生活のほとんどすべてが召使いまかせだったド・ブロイ家にあって、ルイは生涯、召使いに頼るくせから抜け出せなかった。1人では身づくろいも、些細なことさえできなかった。ただ後にアンリ・ポアンカレ研究所では、他の教授は誰もしないのに彼だけは授業後黒板をていねいに拭いて帰ったという。このことが伝説のように語られた。

4）物理学の研究を始めると、ルイは自分の人生を全く変え、人が信仰の道に入るように科学に身を捧げることを決心した。結婚や社交は精神集中の妨げになるからと名門の娘と取り決められた婚約も破棄。後に、親友のアンドレ・ジョルジュが、彼を「裏切って」結婚したとき、ルイはその祝いの手紙に「もうゼミナールで会えなくなるのは残念だ」と書き送った。結婚すればもう自由はないものと思っていた。

5）ルイは、母の死を契機（1928）に、一族の生活ときっぱり訣別し、パリ郊外のヌーイで簡素な生活を始めた。勤めている大学には地下鉄で通った。彼がソルボンヌの教授になったとき、親族の1人は「ついに小役人に成り下がったか」と軽蔑的な口調で言ったという。

6）90歳のとき入院。病床で付き添いの看護師が別の看護師に彼を紹介しながら「ご存知でしょ、ド・ブロイさんは大学者なのよ」と言うと彼は手を振り、「むしろ大学者だった、と言ってください。もう私はありきたりの老人でしかありません」と応じた。

7）1987年、パリのルヴシンヌの個人病院にて95歳で死去。葬儀は遺言に従って「紋章も演説もなく」つまり貴族の儀式もアカデミーの演説もなく簡略に執り行われた。

注1：回折とは、障害物をよけて通ることで、壁を隔てて2人の人間が会話できるのは音の回折であり、太陽光にシャープペンシルの芯をあてると、周縁のぼやけた影ができるのは光の回折。

注2：1900年、マックス・プランクによる熱放射の公式の発見以来、物理学は「不連続な量子」に直面してその解釈に混乱していた。混乱を整理すべく、第1回ソルヴェイ会議がブリュッセルで開かれた。この会議の参加者は議長のローレンツを始め、マリー・キュリー、ラザフォード、アインシュタイン、ポアンカレ、ゾンマーフェルト等々といったそうそうたる顔ぶれで、主役はマックス・プランク。そして、この会議録を編集した1人が兄のモーリスであった。当時19歳であったルイは出版前の会議録に目をとおすことができ、深い感動を覚えたという。

注3：100ボルト程度の電圧で加速したときの電子のド・ブロイ波長は、エックス線の波長に近い。このような電子線を結晶に当てれば干渉縞などの観測によってド・ブロイ波の存在は確認される。波としての性質が実際に観測されるのは、電子線のような極めてミクロな状況下であり、通常の日常生活でこれが問題となることは、ごく例外的な状況を除いてない。

参考資料

1）Wikipedia, the free encyclopedia：Louis de Broglie
2）三河アララギ、p36、第57巻、第4号（2010）
3）三河アララギ、p36、第57巻、第8号（2010）
4）http://saiki.cocolog-nifty.com/shoka/2007/01/post_7535.html
ジョルジュ・ロシャク、『ルイ・ド・ブロイ－20世紀物理学の貴公子』（宇田川博訳・国文社）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」　鮫島　満

一、島木赤彦　2

この年十月に茂吉は海外留学に出発するのであるが、八月には医師の指導に従って静養するために信州富士見高原に滞在する。ここでは茂吉送別会が開かれ、諏訪温泉ではアララギ歌会が催されている。赤彦はこの翌年、茂吉が富士見に静養していたときのことを思い出して、「去年洋行前病を養うて富士見にありき」の詞書を添えて、

草も木も緑ふけたる野にありて思ひしことは限りなからむ

草の色すでに衰ふる野の家に薬を煮つつ一人ありけむ

あげつらひ諍ひすぎしわが友を遠ちにやりて下思ひをり

（『太虚集』）

と詠んでいる。

赤彦は「斎藤茂吉君西欧に向ふ」の題のもとに次のようにも詠んでいる。

ひとつ日のもとにありしと思ひつついく年久にわれはたのまむ

いたづきのなほのこる君を海山のはたてにおきて思はむものか

病ひにも堪へつつ君は行くらめど堪へられめやもそを思ふものは

病ひなき地にしあらねば天のままに生きてあらむと言のかなしさ

（『太虚集』）

これらには病いが完治したとはいえない体で西欧に向かおうとする茂吉を案ずる気持ちがあふれている。三首目は、君の体を思うだけでもう堪えることができないというのである。四首目は、病気のない国はないのだから天の命ずるままに生きていようという茂吉の言葉を聞くのはつらいというのであろう。このあたりの事情を赤彦は『太虚集』の巻末記にも書いている。赤彦は長崎に茂吉を見舞ったことを述べ、続けて「翌年十一月独逸留学の途に上る時も、矢張り本当の健康者とは言へなかつたのである。そんな体で洋行して大丈夫かと小生が言うた時、斎藤君は『何処にゐても病む時は病む。行くと決まつた処へは行く方がいい』と答へた」と書いている。これも右の四首目の理解の助けになろう。

私は赤彦が歌集に収めた〈茂吉〉を拾って見てきたのであるが、『赤彦全集』には、「人々に送りたる短歌」が補遺されており、そこには、大正十三年一月一日に「斎藤茂吉氏へ」と題する一首、

言にしていはむはかしこはなたれし弾丸に向ひて生かせ給へり

がある。まだドイツにいる茂吉に宛てたもので、「はなたれし弾丸に向ひて」という怖ろしい比喩は慎むべきことだが、元気で研究を続けていることを思うとうれしいというのである。こう詠むときの赤彦の脳裡には必ずしも万全の状態とはいえぬ体で日本を発ったことが蘇ったであろう。

やはり茂吉の渡欧直前に赤彦はこのようにも詠んでいる。

わが友の茂吉の心を恐れしむる大き人ありと知りて年あり

わがどちの茂吉を叱りたまふゆゑ親のごとくにわれら思ひをり

この歌に赤彦は、「呉秀三博士はわが友茂吉君の師なり。大学教授在職二十五年を祝す」と詞書を付している。茂吉が、東大医科大学時代以来の恩師である呉秀三への恩をくり返し書いているから赤彦もその人となりを知っているのである。三十代前半にして「アララギ」編集の先頭に立つような偉大な「茂吉の心を恐れし」め、「茂吉を叱りたまふ」人の存在に畏敬の念を抱いて詠んだものといえよう。のちに茂吉は、「呉先生の賀歌はあれで上等なり土田から送つてもらつて呉先生迄とどけた」（大正十年七月）と赤彦に書き送っている。長崎から帰京した茂吉は恩師の祝賀会（大正十年四月）に出席し、「賀歌」と題する仏足石歌体二十五首を詠んだ。「長崎にわれ明暮れてとりがなくあづまの国の君をしぬびつしぬびけるかな」「しらぬひ筑紫のはてにわれ居れどをしへの親を讃へざらめや仰がざらめや」などがそれである。

三年余の留学を終えた茂吉は大正十四年一月に帰国した。赤彦は、「斎藤茂吉氏帰朝」の題で、

ちちのみの父いまさざる故郷を遠思ひつつ船出せりけり

（『柿蔭集』）

と詠んでいる。「父いまさざる故郷」は、茂吉が大正十二年七月に実父守谷伝右衛門を亡くしたことを差している。茂吉は父の死や関東大震災のことを留学先のドイツ知った。震災で青山病院に大損害を受けた養父紀一からは即刻帰国せよとの催促があり、茂吉は大正十三年十一月三十日にフランス・マルセーユから日本郵船榛名丸に乗船、帰国の途についた。右の歌は、父のいない日本へ帰ることを悲しみながら船に乗る茂吉を思いやって詠んだものである。

日本からの送金が途絶えた茂吉は、赤彦に、知人やアララギ会員に借金する労を頼まれてくれないかという手紙を書いており、赤彦もそれに出来うる限り応えようという意思を示したのだった。

和歌から派生した季語の本意（その二十一）

「かさね」「笹」　佐藤喜仙

60　桃の花（源平桃・桃園・桃見・桃花村）

「春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ乙女」

大伴家持（万葉集）

「君がため我が折る花は春遠く千年を三度ありつつぞ咲く」

紀貫之（貫之集）

桃の花は桜が終ってから咲きはじめる。どちらも葉に先だって咲くので、花が存分に観賞される。桃は中国原産であるが、古くから日本に植えられた。家持の歌は「樹下美人」を歌に詠み取ったものと思われるが、桃の花の美しさを称えている。

一方貫之の歌は中国の古俗の三月上巳、後に三月三日となり桃の節句となるのであるが、その行事に託して読まれている。

例句

野に出れば人みなやさし桃の花　　素十
ふだん着でふだんの心桃の花　　綾子
桃の花を満面に見る女かな　　青々

61　若駒（馬の子・春の駒・仔馬）

「粟津野のすぐろの薄角ぐめば冬立ちなづむ駒ぞいばゆる」

権僧正浄円（後拾遺集）

「立ち放れ沢べに荒るる春駒はおのが影をや友とみるらむ」

源兼長（後拾遺集）

子馬は三、四月ごろ生まれるのが一番多い。

駒は馬の子または若い馬のことで、馬と同義にも使われる。春駒は、春の野に放牧した馬のことであるが、仔馬が親馬の側で若草を食む姿は絵になる景である。

例句

若駒の親にすがれる大き眼よ　　石鼎
うまごやし仔馬がふみてやはらかき　　四郎
春の駒東風にあらがふごと歩む　　盤水

62　柳（枝垂柳・青柳・川端柳・遠柳）

「うちなびく春立ちぬらしわが門の柳のうれに鶯鳴きつ」

詠み人知らず（万葉集）

柳は北半球北部を中心に約四〇〇種、日本には約九〇種あるとのこと。「柳は緑、花は紅」と蘇東坂が言ったように薄緑の枝が最も美しく、春の季語とされている。

例句

やなぎから日のくれかかる野道かな　　蕪村
門の灯や昼もそのまま糸柳　　荷風
空を飛ぶ塵やひかりや柳萌ゆ　　耕二

山の辺の道への思い（1）（人麻呂塚）

夏目勝弘

平成二十三年十一月二十五日、今年は奈良線に三度乗ることになった。

一日で行ける行程として、山の辺の道が主目的その途中にある、人麻呂塚を入れることとし、桜井線（万葉まほろば線）のホームに向う。

数人の婦人グループが、山の辺の道のパンフレットを見ながら話し合っている、また定年後の夫婦か室生寺のパンフレット。

万葉まほろば線の奈良から三番目の駅の櫟本（いちのもと）より二K余りの所に、人麻呂塚がある。

山の辺の辺の道の面影がまだ少し残っている（わに）半農地帯の田中の細い道を、人麻呂の郷里であろう、和尓の集落に向う。

柿本一族の氏神である和尓下神社を、五万図で確認しつつの歩みは鈍い、畑に居る老人に和尓下神社を尋ねながらの散策である。

迷うことなく和尓下神社の大鳥居に出ることが出来た。古びた「和尓下神社」の石柱を写真に納め、参道に戻る。

参道は緑陰のトンネルの下、前を行く老人は地元の人、一直線に長く伸びる静寂な道。

もう十二月になるというのに、楓は緑のまま、所どころの梢に一枝のみ紅葉して、アクセントをなしている。

長い参道を歩み左手に広場「ひとまろ児童遊園地」の文字。

広場には直径七・八メートル余り高さ一メートルの土盛りに照葉樹の木立に覆われた人麻呂塚、まだ新しい花崗岩の人麻呂坐像、何故か一トン余りの花崗岩造りの大蛙が子蛙を背に乗せ対座させてある。

人麻呂との関係は知らないが、万葉集には蝦で三首あると思う。祈ることもなく、木立のなかの道を左に回ると薄暗い木立の中に広場が、柿本寺址である。中心に一抱え余の桧の幹の朱色の冴えた一本と近くに板状の巨岩が置いてあった。

寺址の木立を抜け田の広がる北方に、和尓の集落、人麻呂の郷里であろうか。

人麻呂塚、柿本寺址、和尓下神社が社を中心にあり、柿本一族の往時（あめのおしとらしひこ）に思いをめぐらせつつ長い急な石段を、休みつつ上り天押足彦命（ふすまおしひこ）の祖神に一礼をして山を下りた。

衾路を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けるともなし（二―二一二）人麻呂

ここ和尓の集落より、巻向の地に居る妹の元に通った人麻呂を思い（生けるともなし）に勝手な思いをめぐらせるのみである。

車の絶えまない道を櫟本駅までの四K余を歩き始めた。

昼をと思い店を探すがない、王将があったがまだ開店まで三十分あり諦める。

白毫寺（きびょうじ）へは奈良駅からではなく、山の辺（おびとけ）の道の石上布留に近い、京終（きょうばて）駅からと万葉まほろば線で、帯解（おびとけ）駅そして京終である。

一日行程の忙しい旅ばかりがつづく（以下次号）

「歴代天皇御製歌」（二）　貫名海屋資料館

『応神天皇』（第十五代）在位二七〇ー三一〇

第十四代仲哀天皇、神功皇后、第四皇子。

父天皇の死後、神功皇后による朝鮮出征があり、その時の神功皇后の胎中にあられた神の御子である王神は、応神と名付いた。

応神天皇は、朝鮮半島、中国からの貢物を『賢い人をいただきたい』といわれ、それより大陸から、学者王仁（わに）等、多くの人材が渡来して、機織、造酒、大陸文明が日本へ伝来することとなる。

この時期、大和朝廷は内外に大きく発展をする。

応神天皇は神功皇后と共に、皇祖神、武神として日本各地の八幡宮に祭られている。

須須許理が渡来して、御酒を醸造し、天皇が御酒に心が浮き浮きされて詠まれた御歌。

須須許理（すすこり）が　醸（か）みし御酒（みき）に　我（われ）酔（ゑ）ひにけり　事無酒（ことなぐし）　笑酒（ゑぐし）　我酔ひにけり

（古事記　中巻）

「氷魚」のことから（135）

岡本八千代

去年のあの三月十一日が近づいてくる。今頃、宵の明星の輝きがとくに美しい。

あの大震災にやっと生きのびた釜石小学校のある子は、夜空をみて「星は震災があっても消えなかった。あの夜もすごくきれいだった」と言ったという。（岩波図書「こぼればなし」より）……子どもはその時にもう希望のひかりを見つけ出しているかのよう。

しかし、原発の問題、いまだにつづくがれきの問題、復興してゆく中の不安はつきない。が、中日新聞（2月16日）夕刊には「宇宙の掃除・希望の星」の見出しで、「衛星残骸の処理を計画」のことが載っていた。つまり、地上からの宇宙ごみをつかむためのアーチの付いた装置を発射することができるというではないか。（スイスの大学研究？）これも希望のひかりかとも思う。

「当世媛鏡」　むらさき（子規）あらすじ。

一。

○片間千之丞は、酒が好きであったが、ある夕、徳利の酒を一口飲み干して、「昨日の燗ざましじゃないか」とか、また新しい酒を買わしてそれも一口呑むや吐き出し「馬の尿は飲まれぬ」と言って、蒲団を被り、それより穀粒は喉を通らなかった。——今は命まで危なくなってきた。

○そこで、小石川に住む縁者小萩昌之助の妻、おためは、子の才吉をつれて、宿りがけの介抱した。「人間の一期ここに終わりを告げんとする時、千之丞は枕辺に黙然と坐り、お清（自分の子）の顔をつくづくと眺めて涙をこぼした。」

○おために向って、「我が亡き後をよろしく頼む」と言いたげであったがそれも言わずに黄泉の人となってしまった。

○千之丞（お清の父親）亡き後、お清は、小萩ための子才吉と度々逢うようになり、一処に庭に下りて土を盛り上げてその前に木の枝を立て佛様ができたと喜んだりして仲よく遊んだ。

○小萩ためと才吉は自分の家（小石川）を他人に貸して、ついに片間の（清の家）入谷の家に同居した。

○才吉とお清は、「何より嬉しき仲にも竹馬の足掻早く隙を過ぎ手鞠つく数え歌幾度かめぐり〳〵て才吉十五六お清十三四という年齢に」なったのであった。

○ある日、才吉は学校（大学の予備門）より帰り、お清と並んで夕餉を食べている時に、女中のあさは給仕しながら二人に向って、「坊様とお嬢様と人形を並べて楽しんでお出でになったのは誠に此の間のようですがもう十年も経ったのですねエ」、「マアこんなに大きくお成りなすったのをお父様に一目見せたい「もう立派な御夫婦じゃ」と言った。

○それからは、才吉とお清の態度が変わっていった。

（小日本明治27年6月16日）　次号へ

ことのはスケッチ(400)

「英訳」6

今　泉　由　利
Daniel Sommariva　援護

○しかばねのポーズにゐたるヨガのとき隅田川風足より渡り

As I shift into the lifeless pose during my yoga practise,
a river breeze sweeps up my feet.

○高濃度放射能にも生れいづる命のあるを知りたり今日は

Even in highly Concentrated radiation. It is said that life
can be born. Hence life can not be stopped.

○分割は不可能にして最小単位そういうものにはじまりしこと

It is impossible to divide that which is too small to be
seen or held. yet all is made up from these things.

○金箔を貼りてをりたり息殺し裸婦は次第に仏像となり

I outline the figure of a female body and gracefully place
golden leaves around my work of art.
My patience is rewarded by the majestic buddhist symbol
before me.

和菓子街道（66）

http://www.trad-sweets.com/

平　松　温　子

土山の次は、東海道 50 番目の宿場町・水口。京と伊勢とを繋ぐ街道の要所にある水口宿の特徴は、徳川将軍家の宿館であった水口城下としての町割りの名残を残す３筋の道だ。高札場跡を過ぎると、街道は３筋に分かれ、宿場の終わりで再びひとつに集結する。どの道を通っても至る所は同じだが、一般的に東海道は本道である真ん中の道と言われている。

そんな水口宿の真ん中あたり、からくり時計のある広場からすぐのところにある長田屋は、明治 33 年の創業。こちらの名物菓子は、毎年４月 19、20 日に行なわれる水口祭りの大トリである曳山を模った最中「水口ばやし」だ。中でも銘酒餡は、隣に店を構える老舗造り酒屋の清酒を白餡に練り込んだもの。桜の舞う頃、三筋の街道を練る曳山を思い浮かべながら、からくり時計広場で一休み。手の中の最中には、ほのかな酒の香りと祭りの賑わい。

曳山型の最中には、小豆、生姜、銘酒の３種類の餡がある。

◆長田屋
住所：滋賀県甲賀市水口町本町1-7-7
電話：0748-62-0458

お知らせ

▽五月号原稿は、四月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一一四-〇〇二二　今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

▽長年にわたり、熱心に歌稿を送ってきた会員の欠詠は寂しく心配になりますが、再びの出詠にほっと安堵したりしています。健康第一。会員のみなさまご自愛を……。

▽二月二十六日三河アララギ歌会開催。会員十五名出席。

お互の歌の良いところ又わからないところなどを話し合っての三時間でした。説明のみに終わっているもの、一首独立していないもの、単純化がされていないものなども指摘しあいました。何でもない日常の中に詩を見つけ出し、感動を一首にまとめたいものです。

歌会に出ることが刺激となり、勉強の場となると思います。　(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヵ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千円、一ヵ年分四千円とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年三月二十五日印刷　第五十九巻 第四号
平成二十四年四月一日発行　定価　六百円

編集部　岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
　　平松 裕子・山口 千恵子
発行人　今泉 由利
発行所　三河アララギ会
　　三河アララギ発行所　〒四四一-〇三一一
　　豊川市御津町御馬西三七
　　TEL (〇五三三)七五-二〇〇九
　　振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九
　　E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
URL　Homepage http://imaizumiyuri.jp/
印刷所　株式会社　桜創美